



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099(226)5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



カトリック校生徒の絆を繋ぐ

YCCを体験しよう!

「YCC」をご存知だろうか。これは毎年春休み

に参加することはできなかった。

では、ラ・サール学園が6年連続参加しているほか、

実している。加えてそれらの活動を7人程度の班を中心に行っていくのが特色

2月末締め切り。鹿兒島教区から大勢参加し、九州各地に友達の輪を広げよう。思い出に残る有意義なキャンプになるに違いない。

ことが承認された。但しこれは教区の財産に関わるため、今後、経済問題評議会の意見を徴する。

5月11日(木)から17日(水)まで7日間。訪問地はミュンヘン中心。費用は現時点では未確定。

に参加することはできなかった。しかしながら今年も教区が中高生の春の巡礼を取り止め、YCCへの参加をすすことにした。そのため今年まで参加することができなかった中高生にYCC参加の道が開かれた。参加することができずにいた中高生も、YCCのことを知らないことも知らなかった中高生も、今年はずいぶん一緒にYCCを体験して欲しい。

たことがある。記憶は定かでないが、峠の向こうにこじんまりとした盆地が広がる静かなたたずまいに心ひかれた記憶がある。教会付属の宿泊所はガラガラで、「私はフリンです」と名乗る明るく楽しい雰囲気。主任司祭が現れて、一

らしいが、十人も入れればいっぱいになりそうなくさくガラとした印象だけが残っている。ともあれ、記念聖堂の完成とともに始まったと思われる乙女峠まつりも今年で六十九回目となるわけで、どんなことを話せばいいのかまだ決

うして全国から数千人も集まる盛大なお祭りになったのか。それに比べて、あの偉大な東洋の使徒として、日本だけでなく世界中からあがめられている我が大聖人ザビエル様の上陸記念祭の盛り上がり。あちらは、近くの萩をはじめ魅力的な観光地という地の利を得ているからと言えはなるほどと思うのだが。

12月21日(水)教区本部で責任役員会が開かれ、唐湊墓地に納骨堂を建設することになった。

責任役員会

賛美の集い
日時 2月11日(土)
14時~15時半
場所 本部会議室

司教執務室便り

津和野カトリック教会から大きな封筒が届いた。「巡礼の案内をどうして僕に?」5月3日のミサには全国から千五百人もの参列者があるという。「すごいなあ」と感心していると、「郡山司教様が今年の乙女峠まつりのミサを捧げて下さる」という続きの文章に思わず飛び上がった。早速スケジュールを開くと確かにあった。そういえば、昨年、何かのことでお断りしたとき、「来年なら」と約束したことを思い出した。

津和野といえば、吉野教会にいた頃、荷物用の自家用車一台を貸して大学生数人でバイク巡礼をし

乙女峠まつりに思う

ザビエル上陸記念祭の活性化のために

同思わず顔を見合わせたものだ。早速向かった乙女峠のうっそうとした森の広場の一角にひっそりと立つお堂が印象的だった。

九四八年に記念聖堂が建てられたとある。あのととき見たお堂のこと

まつていないので不安ではあるが、記憶の溝を埋めてみたい気持ちもあって楽しみな感じでもあり。

ところで、乙女峠の殉教者たちの中で列聖された人はいない。意外に思うのだが、それだけに、ど



今年のザビエル上陸記念祭の準備委員会はすでに始動しようだが、日本中から巡礼者が参加するお祭りにするには、何が必要なのか、みんなが知恵を出してほしい、と思う。

= 聖霊について学びませんか? =

指導: フランシス・マッケイ神父 (聖コロンバン会)
テーマ: 「約束された命」
日時: 4月19日から毎週水曜日、8回。午前10時~正午
場所: 教区本部 (変更の可能性あり)
参加費: 自由献金。テキスト: 「聖霊による刷新」事務所ヒスロ発行『新生への門出』(500円)。セミナー開催中に販売します。
主催: 聖霊による生活刷新セミナー奉仕委員会 (担当末吉神父)

聖霊はいつもわたしたちを導いてくださり、主の愛と喜び、平安を惜しみなくくださっています。いつも喜ぶことができたら、それは聖霊のおかげです。7週間のセミナーで、聖霊の働きにゆだねながら、聖書を読み、祈り、分かち合いをします。神の子として生きる恵みをお互いに豊かにするために、参加してみませんか。
問合せ: 久留 (090-4582-1824) 柳 (090-4587-2187)

2月11日は世界病者の日

教皇ヨハネ・パウロ二世は、1984年2月11日(ルルドの聖母の記念日)に使徒的書簡「サルヴィフィチ・ドロリス」苦しみへのキリスト教的意味」を発表し、翌年の2月11日には教皇庁医療使徒職評議会(現・保健従事者評議会)を開設しました。そして1993年からこの日は「世界病者の日」と定められ、毎年教皇メッセージが発表されています。

鹿兒島教区で福音宣教において多大な貢献をしてくれているレデンブートル会司祭たちは、ここ数年、高齢等によりドイツに帰国、また帰天されている。教区ではその恩人司祭たちの訪問と墓参の巡礼を計画した。日程等は以下の通り。

参加者募集

定員 20人 問合せ・申込 教区本部 099(226)5100

今年の11月18日、19日、本田哲郎神父（フランス人）を招いて講演会を実施した。講演を依頼した時、「鹿兒島カトリック正義と平和協議会の応援に行きます」と快く引き受けてくれた。3回の講演会の参加者は、延べ120人であった。鹿兒島市を始め、良、加世田、指宿からも参加者がいた。なかには都内在住で、たまたま帰省中に参加された人もいた。

今回の講演会の目的は、日雇い労働者に学びつつ聖書を読み直している本田神父の話の聞き、貧しく小さくされたものと共に生きる信仰について考えること、福音宣教のかなめとなる「正義と平和」を聖書に基づき理解すること、信仰の核心となる「イエスがどんな方であるか」「神はだれを選んだか」について理解すること、などであった。

一方的な「講義」にならないように、講師と参加者との交流を図るようにした。提出された多くの質問にも丁寧に答えていただいた。終了後の感想は「良い企画を実現してもらえた」「話を聞いて『目から鱗』であった」「講師の人格が出ていて良かった」「聖書のメッセージが腑に落ちた」などであった。

参加者からいただいたカンパは総額58・350円だった。講師の交通費・宿泊費以外の残金は「鹿兒島カトリック正義と平和協議会」の活動に使用させていただくことにした。感謝。

なお講演会の内容をDVDにした。3枚セットで2000円。購入希望の方は、2月末日までに申し込みのこと。申込先は次の通り。080（1704）8315 山下。以下は講演会に参加した方々の感想。（50音順）

本田さんとの出会い
私と本田神父との出会いは大阪の釜ヶ崎三角公園内の「ふるさとの家」であった。私たちは「奄美人による奄美人のための奄美のたのめ勉強会」をするため、関西在住の奄美群島出身者に声をかけ集まった。そこで本田神父は笠利出身、私は沖永良部2世とお互いに自己紹介をしたと思う。

私はクリスチャンではない。しかし、短大は純心短大、大阪で最初に暮らしたところは「聖家族寮」というキリスト教の寮、そして大阪市の島之内教会でゴスペルを歌ったりとキリスト教に縁があった。つまりキ

訳の聖書であれば、私でも自分の中にイエスの言葉が入ってくるのではないかと。本田神父がいつまでもお元気に、ふるさとの家で活動されることを願っている。（有川洋美）

聖書の読み直し
本田神父はローマ教皇庁立聖書研究所で学び、フランススコ会日本管区長・新共同訳編集委員などを歴任し、その後1989年から大阪釜ヶ崎で日雇い労働者に関わりながら同時に聖書の読み直しを行った。社会生活の低みにある人々を通して、あらためて聖書の個人訳に取り掛かることを決心されたとのこと。いろいろな人々との出会いやかかわりの中で目線を変えたこと。

聖書のいろいろな箇所についてより分かりやすい言葉で話してくれた。

私たちは、多くの神父から説教を聞いて聖書の教えを理解している。その説教で使われる言葉や表現の違いに戸惑ったり、納得することもある。本田神父は「神さまのなさりようは、まず社会の低みで暮らす人々を選んで行動を始められた」と話した。

イエスさまはお生まれになり、最初に羊飼いたちに見れた。その羊飼いの仕事は、昼間は羊が仲間外れにならないように見守り、夜は肉食動物に襲われることがないように守ることであり、大変な仕事である。羊の血を見る仕事なので、罪深い職業とされてきた

め、他人の冷たい視線にさらされてきた。マリアさまは普通の家庭で成長された方である。ヨゼフさまはダビデの子孫であるが、大工の仕事。本田神父によれば、その当時のナザレでは石工である。12人の弟子の中には、魚の血を見る職業のゆえに、律法の罪の意識に苦しむ漁師たちが選ばれている。これらのことで神さまのなさりようが良く分かった。先人たちの努力で、現代の人間社会はすべての人

が理不尽に差別されることなく、基本的な人権を有し自由平等の精神が引き継がれてきた。民主主義社会を作り上げた人間の歴史の基になっっているのは聖書を読み解いて、分かりやすい論理で先人たちに教えた結果で

あると理解している。本田神父は講演の最後で「私たちは人との出会いの中で、イエス・キリストを見るのです。その教えは一人ひとりが大切にされること、正義と平和と喜びで満たされていること、これがキリスト教の本質です」と話した。今回は大阪釜ヶ崎に行き、改めて聖書の翻訳の見直しをすることに意義を見出されたことに注目して感想を書いた。（川口 茂）

福音を生きる
「キリスト教を卒業しなければ福音の勘所は掴めない」これは本田神父の持論である。理解が難しい考えである。ミサに足繁く通い、教会の行事に参加し、毎日の祈りを欠かさず務め

る。それはとても大切な事であるけれども、それだけではないのですよ、という事であった。

その人がどんな集団に属しようとも、信者であろうがなからうが、イエスのように行い生きる事はできるのである。はらわたを突き動かされる如く、低みにいる人々の痛みと共に感じ、お互いを大切にしたいなさいという事である。また復活したイエスは、頭の切れる英雄的存在ではなく、一人の貧しい汚れた人の中に現れる汚れを担う人であった。弟子たちですら復活したイエスに気付かなかつたのだから。復活したイエスは病に苦しむ人の中に、孤独な人の中に、また幼子の中にあらわれ、私たちの差し伸べる温かい手を待っているのかもしれない。ねたまず、うぬぼれず、思いあがらず、自分の利を求めず、人を不正に抑圧して喜ばず共に真実を喜ぶ事である。そして、そこには正義と平和がある。（田原 京子）

原発のない社会を
私は原発に危険性を感じている。原発の事故が起きれば、人間の命を秒単位で奪うと報道されている。現代の科学では無害化できないだろう。また自然破壊も広範囲に及び、人類の生活環境も破壊される。他のどんな悲惨な事故よりも、修復に膨大な時間と経済的にも膨大な負担がかかる。作ったものは廃炉にしなければ危険である。何百年間も燃えカスは保管しなければならぬのが現在の状況である。私が「正義と平和協議会」に参加したのは、原発のない社会を望むからである。

今回、「正義と平和協議会」が本田神父の講演会を実施した。本田神父が釜ヶ崎で日雇い労働者とコミュニケーションをテレビで見ることがある。そこで妻と2人で話を聞きたいと思った。聖書の言葉を行動に移す釜ヶ崎の生活は、本田神父でないときけないだろうと思つた。体も頑丈そうで精神面でも本心に強い神父である

と判断した。先代から熱心なカトリック信者の家庭に生まれ育つたらしい。私は退職後に、福祉に少し携わっている。人々の幸せを考えている福祉とキリスト教は目指すものは一致していると感じている。それを実践している本田神父の強さには福音があると考えた。どんな時でも相手を大切にされる神父さんが、これからは健康で活躍されて、小さくされた人々に福音が伝わることを祈っている。（濱崎純利）

信仰とは
あの山に湖の中に動けと信じて疑わず祈れば、必ずそうなる」と聖書にあるけれど、それは祈るだけではなく、例えばスコップと一輪車を持ってきて、山を少しづつ切り崩していけば、そ

のうちは見かねた近隣の人々が手伝い、しまいに行政まで動かして実現してしまふ。そういうことだとわかったことが心に残っている。ああだこうだと思わないうで、わずかな働きでもいい、具体的に信じて行動することだと。（本村裕之）

講演会の実り
今回の講演会の収穫はたくさんあった。先ず、信徒の力で企画・準備・実施ができたこと。信徒1人だけでは困難なことも多い。2人、3人集まれば何かができる。動き始めると応援してくれる方、協力してくれ

る方が大勢いることが分かった。準備の段階、講演会当日の運営、終了後の片づけにおいて、役割分担がうまくできて、チームワークがとれていたと思う。

2番目の収穫は人と人との交流ができたこと。特に教会に属さない人との交流は大事にすべきである。福音化が進まない現状を打開するために本田神父の「キリスト教を卒業しなければ福音を掴めない」という主張を検討すべきだと思ふ。

最後に最も大きな実りは「聖書を発見する」ことができたことだ。「聖書は読むものではない、生きるものである」とこれは、足尾銅山鉱毒事件に生涯を賭けた田中正造の言葉である。聖書の知識が増えれば、それに比例して信仰が深まると考えがちである。しかし、大事なことは小さくされた者の側に視点を定めることと、具体的に行動することである。今回の講演会で学んだことを生活の場で取り組むことが福音の喜びになると確信している。（山下和実）

本田哲郎神父講演会報告 鹿兒島カトリック正義と平和協議会

聖書のいろいろな箇所についてより分かりやすい言葉で話してくれた。

私たちは、多くの神父から説教を聞いて聖書の教えを理解している。その説教で使われる言葉や表現の違いに戸惑ったり、納得することもある。本田神父は「神さまのなさりようは、まず社会の低みで暮らす人々を選んで行動を始められた」と話した。

イエスさまはお生まれになり、最初に羊飼いたちに見れた。その羊飼いの仕事は、昼間は羊が仲間外れにならないように見守り、夜は肉食動物に襲われることがないように守ることであり、大変な仕事である。羊の血を見る仕事なので、罪深い職業とされてきた

め、他人の冷たい視線にさらされてきた。マリアさまは普通の家庭で成長された方である。ヨゼフさまはダビデの子孫であるが、大工の仕事。本田神父によれば、その当時のナザレでは石工である。12人の弟子の中には、魚の血を見る職業のゆえに、律法の罪の意識に苦しむ漁師たちが選ばれている。これらのことで神さまのなさりようが良く分かった。先人たちの努力で、現代の人間社会はすべての人

が理不尽に差別されることなく、基本的な人権を有し自由平等の精神が引き継がれてきた。民主主義社会を作り上げた人間の歴史の基になっっているのは聖書を読み解いて、分かりやすい論理で先人たちに教えた結果で

あると理解している。本田神父は講演の最後で「私たちは人との出会いの中で、イエス・キリストを見るのです。その教えは一人ひとりが大切にされること、正義と平和と喜びで満たされていること、これがキリスト教の本質です」と話した。今回は大阪釜ヶ崎に行き、改めて聖書の翻訳の見直しをすることに意義を見出されたことに注目して感想を書いた。（川口 茂）

福音を生きる
「キリスト教を卒業しなければ福音の勘所は掴めない」これは本田神父の持論である。理解が難しい考えである。ミサに足繁く通い、教会の行事に参加し、毎日の祈りを欠かさず務め

る。それはとても大切な事であるけれども、それだけではないのですよ、という事であった。

その人がどんな集団に属しようとも、信者であろうがなからうが、イエスのように行い生きる事はできるのである。はらわたを突き動かされる如く、低みにいる人々の痛みと共に感じ、お互いを大切にしたいなさいという事である。また復活したイエスは、頭の切れる英雄的存在ではなく、一人の貧しい汚れた人の中に現れる汚れを担う人であった。弟子たちですら復活したイエスに気付かなかつたのだから。復活したイエスは病に苦しむ人の中に、孤独な人の中に、また幼子の中にあらわれ、私たちの差し伸べる温かい手を待っているのかもしれない。ねたまず、うぬぼれず、思いあがらず、自分の利を求めず、人を不正に抑圧して喜ばず共に真実を喜ぶ事である。そして、そこには正義と平和がある。（田原 京子）

原発のない社会を
私は原発に危険性を感じている。原発の事故が起きれば、人間の命を秒単位で奪うと報道されている。現代の科学では無害化できないだろう。また自然破壊も広範囲に及び、人類の生活環境も破壊される。他のどんな悲惨な事故よりも、修復に膨大な時間と経済的にも膨大な負担がかかる。作ったものは廃炉にしなければ危険である。何百年間も燃えカスは保管しなければならぬのが現在の状況である。私が「正義と平和協議会」に参加したのは、原発のない社会を望むからである。

今回、「正義と平和協議会」が本田神父の講演会を実施した。本田神父が釜ヶ崎で日雇い労働者とコミュニケーションをテレビで見ることがある。そこで妻と2人で話を聞きたいと思った。聖書の言葉を行動に移す釜ヶ崎の生活は、本田神父でないときけないだろうと思つた。体も頑丈そうで精神面でも本心に強い神父である

と判断した。先代から熱心なカトリック信者の家庭に生まれ育つたらしい。私は退職後に、福祉に少し携わっている。人々の幸せを考えている福祉とキリスト教は目指すものは一致していると感じている。それを実践している本田神父の強さには福音があると考えた。どんな時でも相手を大切にされる神父さんが、これからは健康で活躍されて、小さくされた人々に福音が伝わることを祈っている。（濱崎純利）

信仰とは
あの山に湖の中に動けと信じて疑わず祈れば、必ずそうなる」と聖書にあるけれど、それは祈るだけではなく、例えばスコップと一輪車を持ってきて、山を少しづつ切り崩していけば、そ

のうちは見かねた近隣の人々が手伝い、しまいに行政まで動かして実現してしまふ。そういうことだとわかったことが心に残っている。ああだこうだと思わないうで、わずかな働きでもいい、具体的に信じて行動することだと。（本村裕之）

講演会の実り
今回の講演会の収穫はたくさんあった。先ず、信徒の力で企画・準備・実施ができたこと。信徒1人だけでは困難なことも多い。2人、3人集まれば何かができる。動き始めると応援してくれる方、協力してくれ

る方が大勢いることが分かった。準備の段階、講演会当日の運営、終了後の片づけにおいて、役割分担がうまくできて、チームワークがとれていたと思う。

2番目の収穫は人と人との交流ができたこと。特に教会に属さない人との交流は大事にすべきである。福音化が進まない現状を打開するために本田神父の「キリスト教を卒業しなければ福音を掴めない」という主張を検討すべきだと思ふ。

最後に最も大きな実りは「聖書を発見する」ことができたことだ。「聖書は読むものではない、生きるものである」とこれは、足尾銅山鉱毒事件に生涯を賭けた田中正造の言葉である。聖書の知識が増えれば、それに比例して信仰が深まると考えがちである。しかし、大事なことは小さくされた者の側に視点を定めることと、具体的に行動することである。今回の講演会で学んだことを生活の場で取り組むことが福音の喜びになると確信している。（山下和実）



講演会の様子

押学生生の「僕の長崎への道」

(5)

2月25日(木) 姫路

「一泊の予定でしたが、もう一晩泊めていただけませんか」

「昨晚、松永神父に頼った。肉刺が、水を抜き潰しても潰しても生じ、幾層にもなっている。左の脛は腫れ上がったまま。いまの足の状態ではインターバルが必要と考えた。また、これから入る広島教区内の、経路の検討や宿泊の手配の必要も。幸い松浦神父から、二つの教会で宿泊の了解を得たとの知らせが松永神父にあった。ただただ感謝。朝、洗濯。いくつかの教会に電話を入れ、宿泊を依頼。それでも数カ所、経路に教会がない。インターネットで検索したが、宿らしきものすらない場所も。いよいよテントを張らねばなるまいか。

夕方、銭湯から帰ってきた。風呂が冷たい。鍋、釜、生活用品を積んだ自転車が数台、教会の傍らに。また教会の花壇に腰かけた年配の男たち。誰もが薄汚れ、疲



姫路教会にて

れきつた風。門前では、一見してそれと分かる身なりの男を警察官が何やら問い質している。炊き出しのよう。

「淳心会の司祭館ですか?」
「いや、松永神父さまのお住まいです」
「だから、どこにいるか分からない」
「姫路教会の神父さまです」

「だから今日、どこにいるか分からない」
不毛なやり取りの末、東京の神学院の事務の方が書いたメモ(松永神父の携帯電話の番号が記されている)を示し、「申し訳ありませんが、ここから電話をかけさせていただけませんか」と請う。渋々と手渡された電話でコール。松永神父が教会から現われた。途端、対応は手の平を返すかのように。

旅する僕は、マウンテンパーカー、トレッキングパンツ、軽登山靴という出で立ち。おまけに、長らく鉄をいれず放つたらかしの蓬髪だ。リュックを担ぎ、前触れもなく現われたその風体は闇夜、たしかに不気味

だったろう。ホームレスか不審者かと怪しまれたとしても無理はない。押学生だから教会ならどこでも歓迎されるなんて思っちゃいけない。けれど、昨晚の出来事と炊き出しの光景とをくらべ、「イエス・キリストの教会って何だろう」と意地悪く思ってしまう。

2月26日(金) 姫路ー相生: 約23km

午前8時30分、松永神父に見送られ、姫路教会を後にする。松永神父とは一昨年、東



ザビエル教会学校

はつせいのひせき

わたしは、はじめてゆるしのひせきをうける前にきんちようしました。でもふくだりーダーが、「かみさまといっしょだからだいたいようぶですよ。」

と云ってくれたのであんなにゆるしのひせきができました。神父さまはとてもやさしかったので、しようじきに言わなくちゃと思いましたが、そしてしようじきに言ったら、やさしい声でゆるし

京の神学院で一緒。修道会から教区へ移籍した助祭だつた。昨年の春、司祭叙階。その道程は決して平坦ではなかつたろうと想像する。晴れて司祭となり、生き生きと顔を輝かせ働くすがたを拝見し、我が事のよりに嬉しかった。

国道2号線を、ほとんど一直線に西進。変化のない風景が続く。夢前橋を越え、小休止。太田小学校を過ぎ、マクドナルドでも。普段、マクドナルドに限らない、ファストフード店に入ることはまずない。だが100円でコーヒードリンクが飲め、ゆつたりとしたシートで寛げると知り、味をしめた。コンビニエンス・ストアもこれまで、滅多なことでは使わなかった。ところがこの旅では度々、利用し

てくれました。わたしは、ちゃんと言つてよかつたと思ひました。十二月十八日ははつせいたいです。そのときまでたのしみです。

へんきよひん

十字架のしるし

わたしは、シスターに十字架のしるしやイエスさまのことを教えてもらいました。十字架のしるし、ロザリオのこと、主のいのりなど教会のことなどべんきよひんしました。

せいたいはいりようのさほうは左手を上右手を下にしてうけるおさほうもなりました。ゆるしのひせきをうけてみて、イエスさまはともてえらい神さま、そしてともやさしいかた、そしてす

ている。モーターゼーションをはじめ、お手軽な現代を批判しながら、このていつたらく。人間とはいかに易きに流れるものか。向かい風。おまけに大型の長距離輸送車が飛ばして走る国道。風に翻弄され、よろめいて歩く。

一日のインターバルもあつてか、初めのうちは痛いなりに足が前に出た。が、正午も過ぎれば、一歩一歩が苦痛である。次第に、アスファルトの路面の硬さが、金属音さえ伴って骨に響くかに。実際、そのように耳に聴くのである。相生で、教会の塔が目に入ったとき、教会門前の路上に立つ明石健次神父を見た。感謝。午後3時45分着。

ごいちからのあるかたと思ひました。神父さまは神さまのお力をいただいて人のつみをゆるしてくださいます。このことを大人になつてもおぼえて、ひせきをたいせつに生きたいと思ひます。

はつせいたい

八はた小一年

まへのそのはるひろぼくは、二〇一六ねん十二月十八日に、はつせいたいをうけます。さいきんは、あんまりミサにおくれません。十二月五日日よう日に、こつかいをうけました。かみさまがゆるしてください、うれしかったです。きようかいの七つのひせきのうち、一つうけました。うれしいです。

わたしは弟といっしょにはつせいたいをうけて、とてもうれしかったです。

会と催し (2月)

- 2日(木) 主の奉獻
- 4日(土) 聖体礼拝・カテドラル・6時30分
- 5日(日) ボツファイ神父命日(1988年)
- 11日(土) 年間第5主日
- 12日(日) 世界病者の日
- 12日(日) 年間第6主日
- 13日(月) 国分教会堅信式・9時30分
- 14日(火) ハンマ神父霊名(ヨルダン)
- 16日(木) 出口市太郎神父命日(1958年)
- 19日(日) カトリック大隅学園・教区本部・10時
- 19日(日) 年間第7主日
- 21日(火) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
- 22日(水) 聖ペトロの使徒座
- 25日(土) 学びの講座・教区本部・19時
- 26日(日) 年間第8主日
- 27日(月) 学びの講座・教区本部・14時
- 27日(月) オリブの会・教区本部・14時
- 27日(月) 東條一浩神父命日(2001年)

祈りの意向

【祈祷の使徒会】
世界共通・苦しんでいる人たちへのなぐさめ
日本の教会・福音的価値観の証

文芸

短歌

始良教会 川口節子
純白の山茶花舞い散る冬の朝糸永司教様主に召さる

始良教会 川口節子
聖ニコラオサンタと成りて永遠の愛
鹿兒島純心 川上和
さやかな夜羊のにおい御子包む

鹿兒島純心 川上和
ダマスコの栄光身におびひたすらに証しの宣教代々に輝く

吉野教会 徳永ノブ子
初ミサや齢重ねる主に感謝
バザーワインで雑煮の膳や母の味
初空を仰ぎ穏やか日を浴びる

国分教会 市来房枝
司教座の慈しみの門くぐりにきサンタ・マリア神父と共に
オートバイにて訪ねし夫に託されぬ神父は吾に詩篇一冊
(久留米聖マリア病院)

国分教会 政ノブ子
降誕祭光求めて皆集う
持ち寄りて聖夜の集い夜も更けて

故・糸永真一名誉司教を偲ぶ

たくさんの「ありがとう」を届けたい

多くのことを学びました

志布志教会 久保直基

糸永司教様

「司教になりたい」という小学生の私の未熟な願いを、南九州小神学院に受け入れてくださったのは糸永司教様でした。その時の院長神父様が、大野神父様でした。小神学院を卒業後、迷う私の南山大学への進学を認めていただいたのも司教様でした。そんなわがままを受け入れていただいたにもかかわらず「家庭を持つて父の愛を実践したい」と司教への道を諦めた私は、司教様を悲しませてしまいました。名古屋から帰ってきた私に「直基、お前もダメだったか？」と悲しそうに振り向かれた姿を今もはっきりと覚えています。



堅信の秘跡を授ける糸永司教

でも司教様は、2年後にはまた私に「教区で働かないか？」と声をかけて、教区本部に迎え入れてくださいました。放蕩息子を許し迎える父の愛に気づかせてくださいました。本当に救われた思いで「これにこたえなきや」と嬉しかったのです。

教区本部では、青年たちの活動をサポートする仕事や教会の様々な働きを支える仕事をさせていただき、司教様の近くでたくさんの方々と接する機会もいただきました。司教様や多くの神父様方とお話や働かれるお姿に接することを通して、先輩方や信者さんたちからも、たくさん

の油になれたようで、感謝の気持ちでいっぱいでした。教区本部にいらしていただいた期間は、私にとって本当に本当に幸せな時でした。司教様のお車を運転させていた時に、助手席でミサ参加率の低下や教会離れのことを話され、「神様のお恵みに気づいて欲しい。本当に気づけば、問題は解決するんだが」と少し悲しそうに、祈るように話されていたことが印象的でした。「教区民とは、私に任せられた鹿児島県民全員だ」と毅然と言われていたことも思い出されます。

昨年12月、入院されたとき聞いた時、いざれ退院されるだろうから、その時に司教館にお見舞いに伺うことにしようと考えていた。しかし、1週間後に亡くなられた、それも叶うこともなくなった。最初にお会いしたのは、約20年前であった。「教師の会」の学習会であった。とても厳格そうな印象で、近寄りがたく思った。話の中身もカトリック校での宗教教育を述べており、公立学校や一般の私学では通用しないだろうと思いつつ聞いていた。

「お疲れさまでした！」
紫原教会 山下和美

カトリック校の先生は同僚・生徒に自分の信仰を宣べることが問題ないだろうが、一般の学校では、同僚はともかく生徒たちに自らの信仰をストレートに語ることは難しいからだ。それでも教育の大切さ(特に倫理)を述べる司教の熱意は伝わってきた。それ以降は、教区の行事の時に遠くから司教の姿を見ていた。3年前、糸永司教が主宰する第二バチカン公会議の学習会に参加することになり、それ以降1回、傍で話を聞くようになった。それまでの印象が随分変わった。

をいたしながらも、まだまだ司教様が示してくださったものには遠く及ばず、相変わらず弱く逃げ出しそうになる私ですが、司教様の後を継がれた郡山司教様の言葉に救われています。「それでも：喜び、希望、感謝」です。

糸永司教様、今頃は神様の身元にながらこちらを振り向き「直基、何を言っている。まだまだダメだな」とおっしゃっているでしょう。でも、祈り待ってください。でも、祈り待っています。「神様のお恵みを、一人でも多くの人に気づいてもらえよう」今置かれた場所、ともしびの油として私なりにこたえていきたいと思えます。

朝日新聞連載の憲法記事や雑誌「世界」の論文を紹介されることもあった。約1年間の学習会で、糸永司教は信徒との対話・交流と信徒の使徒職への積極的参加を望んでいると感じた。一昨年、体調を悪くされて、学習会は中断した。一昨年夏に入院された時、偶然私の母も同じ病棟

にいたので、見舞うことができた。昨年7月、唐湊司教館での懇親会が最後の機会になった。聞いてみたいことがたくさんあった。その一つは「鹿児島教区の班制度の到達点と今後の課題」である。鹿児島における福音宣教の土台として「班制度」が始まったと理解している。糸永司教が30年前に始めた「班制度」。

「班制度」が始まったと理解している。糸永司教が30年前に始めた「班制度」。どこまでたどり着いて、今後どのように推し進めていくのか、私たちに残された課題である。

糸永司教さん、おつかれさまでした。司教職は心身ともに大変だっただろうと想像していません。どうぞ安らかに休みください。司牧者として読み解かれた「第二バチカン公会議」をひとりの信徒として受けとめ実践していきたいと思えます。ありがとうございます。

+KABAYAN SEKSYON+

María, Ina ng mga Dukha

Noong nagbisita si Papa Francisco sa Pilipinas sa paliparan ng Tacloban, inanyayahan niya ang mga nagdurusang maralita na tumingin kay Maria na nakatayo sa paanan ng krus at hindi iniwan si Hesus: "Hindi tayo nag-iisa; mayroon tayong isang ina; kasama natin si Hesus, ang nakatatanda nating kapatid. Hindi tayo nag-iisa...Tiyak na hindi tayo bibiguin ni Hesus; tiyak na hindi tayo bibiguin ng pag-ibig at pangahalina ng ating Ina."

Binigyang-diin ni Papa Francisco sa pagtatapos ng Misa na si Hesus, sa pamamagitan ng kanyang pagpapakasakit, kamatayan at muling pagkabuhay, ay sinasamahan tayo sa ating paglalakbay. Pagkatapos ay sandaling tumigil si Francisco para manalangin kasama ng mga nagdurusang: "Salamat Panginoon at sinasamahan mo kami ngayon. Salamat Panginoon sapagkat dinadamayan mo kami sa aming mga hapis. Salamat Panginoon sa pagbibigay mo sa amin ng pag-asa. Salamat Panginoon sa iyong dakilang habag. Salamat Panginoon sapagkat niloob mong maging isa kang tulad naming. Panginoon, wala sinuman nawa ang umagaw sa amin ng pag-asa! Salamat Panginoon sapagkat sa pinakamadilim na sandali ng iyong buhay sa krus, inalala mo kami at binigyan mo kami ng isang Ina, ang Iyong Ina. Salamat, Panginoon, dahil hindi mo kami iniwan na maging mga ulila."

Salamat, Panginoon, ang Tagapagligtas naming ipinako ngunit muling nabuhay, sa pagbibigay mo sa amin kay Maria, ang sarili mong Ina, para maglakbay kasama naming sa paghihirap at kamatayan hanggang humantong kami sa kaligayahan ng muling pagkabuhay.

Kaya para sa ating mga nanampalataya sa kristiyanong katoliko, si Maria ay dapat nating bigyan ng pagpapahalaga, paggalang, pagmamahal at pagdedebosyon. Si Maria ay palagi nating nasa tabi kung tayo ay nasa panahon ng pagdadalamhati, palagi siyang karamay natin kung tayo ay nalulumbay at nalulungkot. Isa siya tunay na ina na kasama natin palagi. Hindi niya tayo pinapabaya. Lahat ng ating kahilingan ay palagi niyang pinapakinggan at kanyang ipinapaabot sa kanyang Anak na si Hesus. Kaya sa lahat ng may mga dinadaan na mga pagsubok huwag pong mag-atubili na tumawag sa ating Mahal na Ina, dahil nandiyan siya palagi, nakabantay, ang Ina ng mga dukha.

Katekismo sa Taon ng mga Dukha (Fr. Dino Orolfo)

